

実践校が語る  
探究学習の推進のあり方

## 事例 1

東京都・私立田園調布雙葉<sup>ふたば</sup>中学・高校

# 既存の活動を生かし、全校体制で多様な視点からの フィードバックを得られる機会を創出

東京都・私立田園調布雙葉中学・高校は、長年取り組んできた表現学習を、2年間の体系的な探究学習へと発展させた。生徒主体の活動とすることを重視し、学年会、進路学習指導部、外部組織の三者によるフィードバックの場を設け、全校体制で探究を深められるようにしたのが特徴だ。

### 探究学習のねらい

社会で求められる総合力を  
育むため、探究学習を開始

東京都・私立田園調布雙葉中学・高校では、2018年度の高校1年生から、全校体制での探究学習を始めた。同学年から、「大学入学共通テスト」が実施されるため、同校が卒業時の生徒像に掲げる「自らの能力に気づき、社会のため、他者の幸せのためにその力を活かすことができる人になることを目指す生徒」が備える資質・能力の1つとして掲げる、社会で求められる課題解決力や主体的行動力といった「総合力」を、より強化して育成したいと考えていた。3学年主任の桜井吾朗先生は、次のように説明する。

「生徒には、試行錯誤しながら自分の答えを導く力を身につけてほしいと考えていました。そのためには、『主体的・対話的で深い学び』の実現が不可欠だと感じ、本格的な探究学習に挑戦しようと考えました」

それまでも同校は、中学校ではグループ活動、高校では週2回の表現学習や学校行事で、総合力を育ててきた。ただ、表現学習では、課題設定を教師が行い、生徒がその課題について探究し、その結果を校内で発表するといった内容であったため、総合力を十分に高められていないのではないかという課題意識があった。

そこで、長年実施していた表現学習を、生徒が主体的に取り組める探究学習へと発展させようと考えた。

### 探究学習の工夫

既存の活動を生かして  
2年間の計画を立てる

18年9月、学年会と進路学習指導部が連携し、探究学習の内容の検討を始めた。表現学習における課題を踏まえ、生徒が主体的に取り組める探究学習にすることにした。

例年、表現学習では、2年次6月の沖繩への修学旅行の事前学習として、生徒は沖繩の基地問題に詳しい新聞記者の講演を聞き、感想をまとめていた。探究学習においても、修学旅行に関連する内容とした(図)。進路学習指導部長の小林潤一郎先生は、当時をこう振り返る。

「当初は、大学のゼミのような形式で探究学習を行う方法も検討しま

したが、ハードルが高いと感じ、既存の活動をベースに、総合力を鍛える内容を検討することにしました」

1年次の探究学習は、修学旅行の事前学習として、1月から全7時間実施した。生徒は6〜7人から成るグループで、沖繩の基地問題をテーマとした課題を自分たちで設定。インターネットなどで情報収集を行い、課題に対する考えをまとめて、ポスターセッションを行う形にすることで、探究学習の進め方を一通り経験できるようにした。

「ポスターセッションでは、新聞記者の方に評価してもらいました。厳しいコメントもありましたが、生徒は真摯に耳を傾けていました。そうした他者評価が、生徒を伸ばすのだと実感しました。しかし、時間

\*1 ベネッセの教材の1つで、実社会に必要な力を身につけるための探究実践のワザとコツが分かる教材。 \*2 ベネッセのアセスメントの1つで、問題発見・解決に必要な3つの思考力(批判的思考力、協働的思考力、創造的思考力)を選択式、記述・論述式、質問紙で多面的に測るテスト。



**内田彩耶子**  
進路学習指導部  
うちだ・さやこ  
教職歴4年。同校に赴任して4年目。図書館司書。



**刑部南月子**  
進路学習指導部  
おさかべ・なつこ  
教職歴6年。同校に赴任して5年目。理科。



**工内栄美子**  
進路学習指導部  
くない・えみこ  
教職歴16年。同校に赴任して16年目。数学科。



**中村俊雄**  
進路学習指導部  
なかむら・としお  
教職歴16年。同校に赴任して12年目。国語科。



**中澤陽二**  
進路学習指導部  
なかざわ・ようじ  
教職歴25年。同校に赴任して17年目。社会科。



**富岡由起子**  
進路学習指導部  
とみおか・ゆきこ  
教職歴33年。同校に赴任して26年目。英語科。



**桜井吾朗**  
進路学習指導部  
さくらい・ごろう  
教職歴14年。同校に赴任して14年目。英語科。



**小林潤一郎**  
進路学習指導部長  
こばやし・じゅんいちろう  
教職歴19年。同校に赴任して19年目。情報科。

の制約もあり、すべてのグループが新聞記者の方から評価をしてもらった機会をつくるのができなかったことは、課題として残りました」

(桜井先生)

2年次の探究学習は、修学旅行後の9月から全15時間実施した。探究学習を計画するにあたり、「探究ナビ」(※1)を参考に計画を立て、さらに資料集としても同教材を活用することにした。

生徒が個々の関心に沿って主体的に探究できるよう、グループの人数は最大3人とし、個人探究でも可とした。課題は、修学旅行での経験を基に、生徒に自由に設定させることとし、調査手法も生徒に考えさせた。そして、11月末の中間発表を経て、翌年2月の最終発表会では、グルー

**東京都・私立田園調布雙葉中学・高校**

- ◎幼稚園から高等学校まで一貫教育を行う女子校。キリスト教精神を基盤とした全人的な教育の実践を目指している。
- ◎設立 1949(昭和24)年
- ◎形態 全日制/普通科/女子校
- ◎生徒数 1学年約120人
- ◎2020年度入試合格実績(現役のみ)  
東京農工大、青山学院大、慶應義塾大、順天堂大、上智大、聖心女子大、多摩美術大、中央大、東京医科大、東京女子医科大、立教大、早稲田大、金沢医科大などに合格。
- ◎URL <https://www.denenchofurubaba.ed.jp/juniorandsenior/>

プごとに10分間のプレゼンテーションを行った。

**多様なフィードバックで  
生徒に様々な気づきを促す**

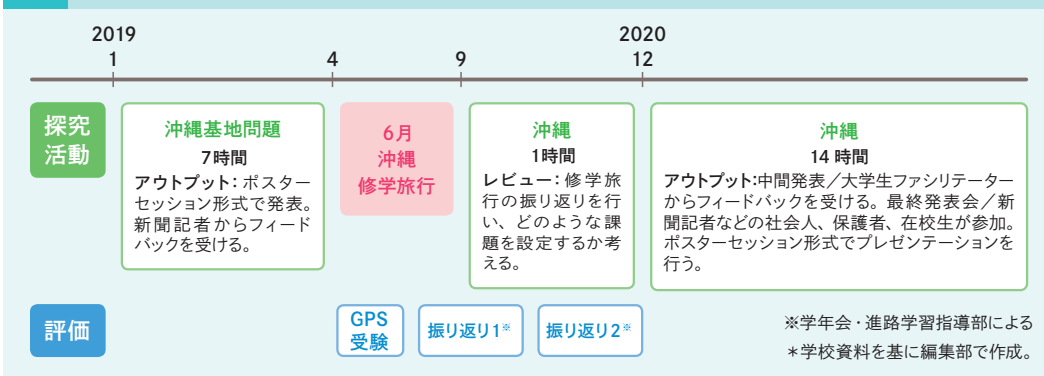
2年次の探究学習は、1年次においてフィードバックの機会が少なかった反省から、その機会を増やし、より深く探究できるような工夫を施した。

まず、探究学習で育まれる能力を測定するため「GPS-Academic」(※2)を導入。さらに合計で44にも上るグループが形成されたため、支援が行き届くよう、高校生向けの教育プログラムの開発・提供を行う一般社団法人Foraと連携し、ファシリテーターの大学生を派遣してもらった。ファシリテーターに定期的にフィードバックをしてもらうことで、生徒の探究が、より深まるようにした。学年会の教師、進路学習指導部の教師、大学生が、3人1組となり、担当グループの進捗を確認。主に3つの方法でフィードバックを行った。

①オンラインでの進捗確認  
各グループで探究学習の概要をまとめた探究計画書を作成し、Google

Classroom(※3)で担当教師に提出。学年会と進路学習指導部の教師、大学生が、探究計画書に改善点や質問を記入した(P.13写真1)。中間発表後の修正案も同様に提出させ、三者からフィードバックを行った。

図 2018年度入学生の探究学習のスケジュール



\*3 教師による課題の管理をサポートするツールで、課題の出題と採点、フィードバックの提供などが可能。

写真1 オンラインでの進捗確認



各グループで事前に探究計画書を作成し、Google Classroomで担当教師に提出させた。教師などがフィードバックは行うものの、修正の方向性は生徒に委ねた。

②活動中の支援

探究学習中、教師は担当グループを見て回り、適宜、声をかけた。3学年担任の中村俊雄先生は、生徒への指導は難しかったと語る。

「探究学習の指導経験がほとんどなかったため、何をアドバイスすればよいのか戸惑いました。ほかの教師と話す中で、教師は生徒に知識を与えるのではなく、自分が疑問に思ったことを伝えれば、生徒は考え、課題を自分たちなりに深めてくれるのだと考えるようになりました」

大学生は、ファシリテーターとして6時間、活動に参加した。その時の様子を、3学年担任の工内栄美子先生は次のように話す。

「生徒だけでは気づけないことを

アドバイスしてもらえたことで、生徒は最終発表会まで気持ちを切らすことなく、課題を深めることができました」

③口頭試問

中間発表後、各グループの修正の方向性を確認するため、口頭試問を2回行った。2回目は、新たな気づきが得られるよう、担当ではない教師と大学生が質問者となった。1学年担任の刑部南月子先生は、次のように振り返る。

「生徒には、『あなたはどうか考えているの?』『社会に何を伝えたい?』と、生徒自身の考えを引き出す質問を投げかけました。すると生徒は、きれいにまとめるのではなく、等身大の言葉で探究学習の内容を表現すればよいと気づいたようです」

生徒主体で探究学習を進めながらも、準備段階から複数の教師や外部の人にフィードバックをもらう機会を設けたことが、生徒の主体性を高めることにつながった。

課題設定の見直しにより、探究学習を深める

中間発表を受けて、全体的に軌道修正すべき点を伝えたことも、探究

が深まる機会となった。3学年担任の中澤陽二先生は、次のように語る。

「中間発表では、多くのグループが、調べ学習の域を超えられず、探究の深まりを感じるできませんでした。その要因を考えると、『沖繩の珊瑚』『沖繩の自然』といった、漠然としたテーマを掲げるグループが多く、生徒がどのような課題を探究したいのかまで言及できていないことにあると分かりました」

週1回実施していた進路学習指導部と学年会のそれぞれの会議でも同様の課題が上がり、小林先生と桜井先生が中心となって話し合い、生徒に修正の方針を伝えた。

「まず、設定した課題を疑問形で表現するよう伝えました。そうすれば、疑問に対する自分たちの結論を必然的に導けるようになるからです。そして、文献の引用の仕方について説明し、根拠を示した上で、自分の意見を述べるよう指導しました」(桜井先生)

さらに、説得力のある提案とするために、インターネットなどで調べた2次データだけに頼ることを避けるよう、生徒に伝えた。

「2次データには、出典が分からず、信憑性に欠けるものもあります。

写真2 最終発表会の様子



最終発表会には、新聞記者2人、大学生、社会人も参加。鋭い質問も相次いだが、それに応える生徒の姿はほどもうれしそうだったという。

それでは論拠としては不十分なので、関係者に直接話を聞いたり、アンケートを実施したりするなど、1次データの収集に力を入れることが重要であると説明しました」(中澤先生)

進路学習指導部の内田彩耶子先生は、それらの指導をきっかけに生徒の意識が変わったと語る。

「文献の引用の仕方などを徹底したことで、発表資料の信頼性が高まりました。生徒から『アンケートを取りたい』といった相談をされるようになるなど、生徒の主体的な行動も見られました」

また、中間発表では、大学生にフィードバックを依頼。その意義を桜井先生はこう話す。

「最終発表会に向けて内容を見直



## 私の探究学習

### 専門家に話を聞き、 考えを広げる重要性を実感

3年生 遠藤千尋(右)  
小林美織(左)



探究テーマ：「どうすれば平和への意識を高められる？」

概要：平和への意識を高める上で、最も影響力を持つのは教育だと考え、平和教育に注目した。専門家に取材を行い、資料を送ってもらうなどして、沖縄の平和教育について調べた。



遠藤さん 最初はインターネットで情報収集をしていたのですが、中間発表で「信憑性に欠ける」といわれ、グループのメンバーと相談をし、思い切って沖縄県立総合教育センターに電話をして、お話を伺うことにしました。その経験から、多様な視点から調べて課題を深める必要性を学びました。今後、進路先を検討する際も、書籍などを読み、考えを深めていきたいです。

小林さん 最初は、調べるのが「大変そう」と思い、探究学習には乗り気ではありませんでした。実際、グループのメンバーと対話しながらテーマを設定をするのも大変でした。しかし、中間発表でのフィードバックや、専門家の方との交流を通じて学びが広がり、課題を深めることができ、自信になりました。

### 得意分野を生かして 課題にアプローチ

3年生 松本佳奈(右)  
本領里緒(左)



探究テーマ：「戦争の語り部の減少問題を受けて、戦争体験者の私たちにできることは何か？」

概要：沖縄の修学旅行で、戦争体験者から話を聞き、戦争の語り部が減少していることを知った。語り継ぐ方法の1つの手段として、「絵本」を制作することを提案した。



松本さん 私は、自分の考えを他者に伝えるのが苦手でしたが、絵を描くことが得意な私は挿絵を、文章を書くのが得意な本領さんは物語を担当し、2人の得意分野を生かして、戦争の悲惨さを伝える絵本を制作しました。最終発表会後には、「絵本を活用しよう」と協力してくれる方も現れ、自分の行動次第で、社会課題に取り組むことができることを実感できました。

本領さん 発表ポスターの作成時、どうすればうまく伝わるのか、グラフの見せ方などに悩みました。複数の先生に質問したところ、多様なアドバイスをいただき、他者に聞くことで視野が広がり、成果も出やすいと感じました。また、自分の考えをまとめて文章で発表するという一連の流れを通して、文章の力を感じ、卒業後は文学部に進みたいと考えています。

## 成果と展望

### 探究学習が学年全体の 総合力の底上げにつながる

するために、多様な視点からのアドバイスが得られたことは、とても参考になったようです」

20年2月に実施した最終発表会(写真2)には、沖縄の新聞記者や

東京在住の沖縄出身者、大学生、保護者、在校生など、多くの人が参加した。刑部先生が印象に残ったのは、

中間発表時とは様変わりした生徒の自信に満ち溢れた姿だった。

「最終発表会では、『自分たちはこう考えています』と、自分の言葉で伝えられていたことに成長を感じました。また、答えられない質問をされても、無理に答えようとせず、『それは調べていません』と、はっきりと事実を伝えていました」

桜井先生も、探究学習を通じて、同校が生徒に育成したいと考えている総合力が伸びたと語る。

「最終発表会終了後の振り返りで、

『こうすればもっと上手に発表することができたと思う』と振り返る生徒がいました。ほかの教科にも今回の学びを生かしたいと振り返りに書いた生徒もいました。生徒それぞれが気づきを得ていたことは、大きな成果でした」

進路学習指導部の富岡由起子先生は、1つのテーマの探究に取り組むことのよさを次のように語った。

「探究学習では、三者が丁寧にかかわることで、生徒は粘り強く課題に取り組むことの重要性を学び、学

年全体の総合力を底上げすることができたと感じています」

今後の課題は、探究学習の評価の方法の検討やICTの活用だと小林先生は語る。

「事前・事後の評価や、自己評価、他者評価といった、評価の方法を検討していきたいと思っています。また、臨時休業中にオンライン授業などを行い、ICTの活用が進みました。探究学習でも、ICTを活用した他校との交流などに積極的に挑戦していきたいと考えています」